

最期の連作②「神の書」の創作 Ⅱ人間の三部作Ⅱ

芹沢光治良は、神についての連作を書こうとして、伊藤青年「大徳寺昭輝」に憑依して語る**存命の中山みき**「親徳」の求めで、「**神の書**」の連作として**神の三部作**『**神の微笑**』『**神の慈愛**』『**神の計画**』を創作しました。これは天理教的発想で「存命の親様の没後百年祭（一九八六年）」と「親様の立教百五十年（一九八七年）」を刻限として「**世界の大掃除（世界助け）**」を始めるので、作家芹沢光治良に筆の力で手助けをする使命が与えられ、半強制的に書かされたのでした。親様は天理教の教祖であることを超えて、「**人類の母・万物の母**」として世界助けに取組んでいるので、親神も天理王命でなくて「**大自然の親神**」と自覚されています。

この神観はオートヴィルの高原療養所で共に結核闘病をした**天才的な科学者 ジャック・シャルマン**から啓発された神でもあったのです。「**宇宙を創り、宇宙を動かしている偉大な力が、唯一の神**」であり、「**大自然の親神**」であると芹沢光治良も説きます。これはイエス・キリストが説いた親神でもあると自覚されます。ですから、この神の三部作は、イエスの弟子**ヨハネ的な使命**として書かされたのです。三年間で親様や**天の將軍**に導かれて書いたのです。

昭和55（1980）年84歳の2月にモーリス・ルツシーの便りが届き、5月にはジャン・ブルードルからも便りが届きます。二人との文通は昭和59（1984）年88歳の1月まで続いたようですが、**ジャックのことは全く書かれていないのに、芹沢光治良は突然にジャック・シャルマンを登場させたのです。**

『**神の計画**』の終りには、「早く、三作を終り、四作、五作、六冊とつづけて書きあげること」を**親神**から求められ、連作は**人間の三部作**として継続されます。実相の世界で修行をしている**ジャック**が現れて励まされ、芹沢光治良は「**第四作以下、神の書を次々に創作すること**」に取組むのです。

人間の三部作①『**人間の幸福**』は一九八八年92歳の春から始まり、泰山木や紅梅と語り、六年前に七十九歳で亡くなった家内（金江夫人）のことを詳しく回想します。第三章から新しい人物を登場させます。**須田ふみ**と**中村英子**にはモデルになるような女性がいたかもしれませんが、「人間の幸福」のテーマを展開するために虚構したと思われまます。夫婦となる**須田順次**と**中村一夫**とも知的

なエリートとして登場します。

中村（浜）英子は「藤の花の如く、誇るべき豪華な境遇」の富裕な実業家で熱心なカトリックの信者の家に育ちました。カトリック系の大学で仏文学を学び、大学院の博士論文で「**アンドレ・ジイド**」論を書き、指導教官の中村一夫と結婚しました。一夫は芹沢文学の影響でフランスに留学し仏文学を学び、作家に為ろうとしていて、英子は母校で語学と仏文学の講義をしています。須田ふみと度々芹沢邸を訪ねましたが、二年ぶりに一人で訪問し、いきなり「**先生、『神の微笑』に登場した、天才ジャックというのはライク・ジョンですか、実在の人物ですか**」と聞きます。僕（芹沢光治良）は「**実在の人物ですよ**」と答えます。作品の中に、こんな会話を入れたのは、多くの芹沢文学の愛読者が、これまでの諸作品に一度も登場せず、大河小説『人間の運命』にも現れなかったのに最晩年の連作に重要な人物として登場したので、疑問に思っているだろうと、敢えてこのような会話を入れたのでしよう。もし、天才ジャックが架空の人物としたら、作者は二重に嘘をついたことになります。やはりジャック・シャルマンは実在し、神が「**大自然の力**」であり、「作家になること」が、神から君にさずけられた**使命**だ」と導いた恩人であると思えます。英子は、夫の一夫が先生のこととしてお慕いしていると告げます。

須田（福）ふみは、天理教の有名な大教会長の娘で、C大学の文学部言語学科で学び、アルバイトとして国立医科大学の病理学研究室の**須田順次**と出会い、天理教を克服して結婚します。結婚の幸福を感動的に書いています。ふみの夫順次も先生を「**魂の父**」と言っています。主人に会って下さいと願います。

英文学部助教の**川田一郎**や**岡山のY**（警務署長で芹沢文学の愛読者山本正夫氏も「**魂の父**」と言って芹沢光治良を慕います。人間は「**神の子**」だから、神を「**親神**」と呼ぶが、「**宇宙に唯一の親神**」「**大自然の子**」とも書いています。この巻の最期に、**天の將軍**から命ぜられて、作家**大江健三郎氏**に『**神の計画**』七刷を**至急に贈呈**します。元日に「**大江君の手紙と小包郵便**」が届きます。昭和天皇が崩御し、「**平成**」の世になったことも書かれています。

人間の三部作②『**人間の意志**』は、大正十一年に東京帝国大学を卒業した時から回想して書き始められ、昭和三十二年にペンクラブの世界大会が東京で開催されることになり、東中野の焼跡に家を新築したことも書かれています。大自然から「**第五作にかかれ**」と注意され、「**人間の意志**」をテーマに適した主人

公を思索します。天の將軍の忠告で、日本ペンクラブを設立した島崎藤村を回想します。藤村の死後に「将来、どんなことがあるうとも、戦争だけは、してはならない」と想います。戦後に、志賀直哉の後に川端康成が会長になります。昭和26(1951)年のローザンヌの国際ペン大会の帰路に、パリに滞在し、『巴里に死す』が仏訳出版されることになり、新聞でも大きく報道されます。この時に、「四分の一世紀たったら再会しよう」と、誓いあって別れた、高原療養所の同志、天才ジャックとジャンとモーリスの三人が、連絡してくれるものと期待した」と、1951年55歳にジャックのことを思い出したと書いています。

一九八九年には、親様に作り方を教えられて「神の水」を求める人に配るようになり。この水は水道水だが、祈りを込めるので「ルールドの水」と同じに奇跡を起こすとのこと。私はこのことなどは新興宗教のようで心配でした。また、親神に仕える十人の天の將軍がいるとかで、天の將軍の指示で次々に「神の水」を渡します。また、天の將軍から友の会について考えろと言われて、「友の会員には、東京と東京地方に住む者が多く、年一回文学館に集まるだけでは満足できないので、東京で月に一回ぐらいい集まりたい、という多くの希望者があつたな……若くて私心のない文芸批評家志望のAが、一年もしないで、皆の希望を満足させるために、東中野文化センタービルの会議室で、月一回集まって、芹沢文学愛好会を催している……」と書いていますが、この文芸批評家志望のAと言うのは私小患のことです。最初は芹沢文学館東京友の会で月例会は「芹沢文学研究会」でした。ここに私のことを書いたので、この『人間の意志』を署名入りでお贈り戴きました。1990年7月14日に届きました。

第七章以後に、神の実存や「実相の世界」「神の世」と「現象の世界」(この世について詳しく解説します。「実相の世界」には、親神は十柱の神と十人の天の將軍達に仕えられ実存している。天の將軍の中山みきは、もう二段の修行に成功して「すべて生きる物」万物の慈愛の母」と呼ばれるようになります。「実相の世界」は大気圏のなかにあり、人は死んで「実相の世界」に行く、生きた人が「実相の世界」に行くには「死んで生まれかわるほどの苦しい修行が必要だ」と聞く。僕はどんな修行でもすると答えて、夜中に天の將軍に起こされて修行をします。芹沢光治良は聖体を借りて、天の將軍に案内されて「実相の世界」を巡り、天才科学者ジャックにも会います。ジャックに「実相の世界」のことを聞き、あちこちを見学します。一九八九年秋に、わが天の將軍はソクラテス

だと知ったとか。これは面白いですが、読者としては信じられません。芹沢光治良は、建築家Dのこと、パリ留学のこと、帰国後のこと、百武源吾海軍大将のことなど色々回想します。

この年の十一月十一日に、ベルリンの壁が崩壊します。これは親神の「世界助けの成功の一步」であつたとのこと。十二日の芹沢文学愛好会の文芸講演会(作家中村真一郎の講演、ホームコンサート)には、天の將軍に叱られて参加します。会長の「S君は若い者には珍しく、私心のない、細かに気を使う、優しい青年で、常に感謝している」と書いていますが、このS君は鈴木春雄さんです。この講演のことも詳しく書いていますが、ノーベル文学賞の推薦委員の時に、中村真一郎氏を推薦したと告白しています。天の將軍から「神さん、お喜びだよ。きのうは、神さんの喜びの日だったが、今日は、お前の喜びの日だ」と諭されます。戦争末期に、書齋に天才ジャックが現れたとも書いています。最後に、自民党の0(安倍晋太郎氏の病気で、0夫人が「神の水」を貰いに来たことも書かれています。

人間の三部作③『人間の生命』は、ベルリンの壁の崩壊から回想され、一九九〇年94歳の新年に「これこそ、大自然が人類に新しいいのちを授けたのだ」と想ったことから始まります。フランスからモーリス・ルツシーの速達郵便の長文の手紙が届きます。「昨年九月頃、君は十一月十一日のテレビを見る」との芹沢光治良の手紙の返事です。天才ジャックが病床に現れて、光治良のことを語り、のちに実相の世界に案内されます。光治良はモーリスに電話します？

自殺しようとした東大生相田実が来訪し、魂の父子と説得します。六十年近く親しくした女流作家野辺道子が登場します。実青年に野辺道子を紹介します。実青年に語った野辺道子のこと詳しく書かれています。昭和32年頃に天才ジャックが現れていたことが知られます。野辺道子や実青年のことをジャックが光治良に語り掛けます。伊藤青年が大徳寺昭輝として登場し、世界助けの旅も書かれます。芹沢光治良は大修行を経て、大自然と直接に語れるようになります。『人間の生命』を書き上げて、平成3年7月5日に新潮社から出版されます。

次作は「大自然―神の世界」「神の夢」とでも表現したいものになること。「神の書」は、神の三部作と人間の三部作で完成し、次は「天の書」になるのです。ジャック・シャルマンは、果して実在の人物か、虚構の人物か、今後も追求して行きたいと思えます。

最期の連作①「神の書」の創作 Ⅱ 神の三部作 Ⅱ

作家芹沢光治良は、最晩年に連作として「神の書」「天の書」を創作しました。大河小説『人間の運命』を全16巻で書き上げた後に、「文学は、物言わぬ神の意思に言葉を与えることである」をモットーに創作して来た芹沢光治良は、自己の人生は神を信じ導かれた人生であり、その発想で「もう一つの人生を回想して」書いたのが連作「神の書」「天の書」であるのです。全9巻の予定でしたが、第九巻は未完に終わりました。没後に、全8巻を箱入にして『神と人間』と総称されました。もう一つの大河小説『人間の運命』を最晩年に創作したとも言えるのです。その「神」は、天才的な科学者でオートヴィルで共に結核を克服したジャック・シャルマンの説いた「大自然の神」であったのです。

最初のきっかけは、芹沢文学館・東京友の会の月例会芹沢文学研究会で芹沢文学愛好会で、小田原の佐藤徳三氏の質問に答えて、「私が考えている神」について書かねばならないと自覚したことです。妻金江夫人を喪って、50年間の作家生活に創作した膨大な作品を再読し整理して、4年間を過しました。中軽井沢星野の山荘(別荘)で新しい作品を書き始めたが、「ひよつくり森次郎が現れて語りかけました。書いていた「老樗と老詩人の対話」に、「半世紀前に宇宙旅行を希った友、ジャック」のことが書かれていたと**第二作『神の微笑』**に書いています。「フランスの高原療養都市オートヴィルで自然療法した」ことを思い出して庭で仰臥していると、「**激かな声(天の声)**」がした。「大自然を動かしているもの…その偉大な力こそ神である」と聴く。父と母が天理教に入信して、全財産を神に奉納し布教師として、3歳の自分を祖父母の家に残して去ったことから回想します。貧困の中で苦学し、一高から東大を卒業し、官吏を退職してパリに留学します。結核に倒れ、オートヴィルのホテル・レジナで闘病し、天才科学者で月旅行や宇宙の創造神(大自然の神)を説き、作家に成ることを勧められたジャック・シャルマンに出会うのです。作家になった芹沢光治良は、戦時中にキリスト教や天理教を研究します。そして、戦後に天理教の教祖中山みきの評伝『教祖様』を創作しました。この時にも、20年ぶりにジャックを回想します。戦後の昭和26年にスイスのローザンヌで開催された世界ペン大会に

参加した帰路にパリに滞在して『巴里に死す』が仏訳出版されることになった時にもジャックを思います。オートヴィルで結核闘病をした4人衆は、四半世紀(25年後)に再会を約したのに、会えませんでした。ところが、昭和57年4月にモーリス・ルツシーからの手紙がフランス大使館から届きました。返事を送ると、ジャン・フルーデルからも喜びの便りが届きました。『神の微笑』の最後に「モーリスとジャンと文通がはじまって、みなジャックを探し当てようと、書きあい、情報を知らせあっているが、その方は成功していない。」と書き、

「ジャックの消息を知りたさに、僕自身 昭和三十四年以後三度パリに行った際、彼を探すのに苦心したことを、詳しく知らせて、二人の参考に供した。／＼昨年春、モーリスから、大戦直前、ジャックが戦争を嫌悪して、フランス国籍をすてるために、亡命したようだが、亡命先はわからないと悲しい知らせがあった。」とも書いている。第二作『神の慈愛』の初めには「フランスのオートヴィルの療養所の部分で、天才ジャックを中心に四人の若者が、死と闘いながら純粹な精神で、人生を真剣に模索していた。その部分を二章以上読んでいるうちに、僕は自然に涙をこぼしていた。／＼そのジャックが、僕に偉大な大自然の力である親神の存在を、認識させたのだった。」「モーリスにもジャンにも、自ら口実を構えて、愚かなことに、妻の死も知らせずに、手紙も形式的な時候の挨拶か、クリスマスカード兼年賀状のようなものを、送るに過ぎなかった。」「今や一日も早くジャックに会って、語りたい。そんな想いからかれて、先ずモーリスに手紙を書かねばならないと、あわててすぐに書齋に上って机に向かった。」とも書いています。この便り「一九八六(昭和61)年春」は長文で引用されています。「その神について『神の微笑』という長篇小説を書きあげて、七月に出版される予定だよ。九十歳になって、長篇小説を書けたとは、夢のようだよ。」「それにしても、あのジャックの消息はやはり不明だろうか。」「僕の拙いフランス文では、ジャックの神について、今僕が体験している真実は、とても表現できない。」「フランスか日本か、とにかくみんなで会えるような機会をつくって、会ったのをたのしみにする他はない。」等とも書かれています。「このように具体的にジャックのことが書かれているのに、芹沢家に残されているモーリスやジャンの手紙にはジャック・シャルマンのことが全く書かれていないのです。

しかし、森次郎が出て来て、「これは、君でなければ書けない作品だものな。」「文学作品として立派だよ。」と褒めて、「この作品のなかの事実は、作品の性

質上、全部、事実で、フィクションはないだろうな。」と言うと、作者は「勿論だ」と断言している。「天才ジャックの語る真実等、僕は感動で息もできないで読みとおしたものだ。……あれは君のフィクションだと、気がついたんだよ。」と言うと、「あれはフィクションではないけれど」と答えている。芹沢光治良は、**ジャックの事は事実だと主張しているのです!!**

この『神の慈愛』の第一章にジャックが突然に登場し、フランス語で「親しい友、光治良よ。会いたくて、さんさん探したよ。ようやく見つけた。ほんとうに嬉しい。何年ぶりか。君は年とつたな。しかし、立派な作家になって、元気で創作しているのを見て、安心したよ……」と語りかけます。「ジャック……探したのは、僕も同じだ。少しゆくりフランス語を話してくれ。一体、今、君は、どこにいるの」と反応して語ります。「モーリスもジャンもさんさん、君を探したんだよ。何処にいたんだ……」「僕はな、あの偉大な神の大きな愛の腕にいだかれているんだよ。その神の世界助けに、手助けのできるよう、ありつたけ修行して、働かしてもらっているんだが……」死んだのかと言おうとした瞬間に「ジャックの姿はなかった。」「やはりジャックは死んでいたのか」と書いています。翌日にモーリスからの手紙が届きました。娘夫婦がバカンスだからとジャックの消息を探し、リセの同級生のG教授をノルマンディーに訪ね、一九四〇年五月に事故死したと聞き、モンパルナスの墓場でジャックの死を確認したとのこと。事故死というのは、戦死のことと思われると書かれています。またジャックの声がして、戦死を暗示し、神の世界助けの手伝いを一緒にして行くこうと語りました。その夜にジャックの戦死の夢をみて、腰痛になった。天理教の教祖中山みきは、さんさん修行し、親神の世界助けに人類の母として助けているとも説いています。この『神の慈愛』の第二章に確信として「第一に、かつて盟友ジャックが説いた宇宙を動かしている自然の偉大な力である唯一の神が、親神であり、その神がたしかに実在していることを」と書かれています。また、「あの盟友ジャックが、昇天して偉大な神の懷に抱かれている」「ジャックは、肉体を持った近代人の知的慾求や感情的哀歎を知っていた」「是非ジャックに会いたい。会わなければならぬ。彼の現れるのを待つのではない、彼を招かなければならない」「九十歳にしてなお感うような僕に、知られざる霊の世界の実相を明らかにして、使命を果す勇氣をさすけてくれるであらう」と**ジャックが死んで、実相の世界で修行している**と書いています。

第三作『神の計画』に、ジャン・ブルーデルに出した手紙が返送されて来たことが書かれ、モーリス・ルツシーの手紙には「あの天才的な科学者のジャックさんが、ユダヤ人だったのか」と書かれていて、それを否定する返事を書きました。ジャックが現れて「僕はユダヤ人ではない」と語り、ドイツのナチスがオランダに進入し「無抵抗な僕が、彼等の弾にあたって、殺されたんだ」と告白します。飛行機がテルアビブの空港に不時着したことを回想し、イスラエルとアラブ諸国との戦争が書かれています。現在、その戦争が再発しています。芹沢光治良は現象の世界で、「親神の世界助けの大掃除の手助け」として神の書の第三作『神の計画』を書き続けます。この三作は光のヨハネ的使命と知らされます。伊藤青年が霊媒して親様(中山みき、ブツダ、イエス、そして親神の言葉)を語ります。そして、ジャックが度々現れて語ります。実相の世界は言葉の相違が無く、日本語での会話が出来るようになります。ユダヤ教や世界の全宗教を問題にすべきたと諭されます。親様から実相の世界には天国も地獄も無い、地獄は現実の世界には有ると知らされます。天の將軍に修行をさせられ、実相の世界を見学します。ジャックに会い「君の修行に感心する」と褒められる。また親様から修行して神の社になるようにと励まされる……

これらの**神の書の三作**は「僕の私小説」になったと自省する。親様に褒められて、「神の心を体して書いた『神の書』と自認する。今後も「第四巻以下、神の書を次々に創作することを」決意したと書かれています。

「あとがき」にも「僕が高原療養所で結核の闘病している時、同じ闘病の同士であった天才ジャックの忠告に従って、実証的経済学に関する学問をすてて作家になる決心をしたのは、文学は物言わぬ神の意思に言葉を与える貴い仕事だ」というジャックの説得を、僕が納得したからだった。「ジャックの説く宇宙を動かしている偉大な力ー唯一の神の存在を、確認しよう」と努力した。」と明記しています。ところが、ジャック・シャルマンが**実在することを証する資料が今のところ無いのです**。ジャック・シャルマンは**芹沢文学の謎と言えます**。

隨筆や自伝にもジャックのことが書かれています。そして、ジャックのことを85歳の芹沢光治良は、墓碑銘に「科学者の盟友ジャックに、大自然の法則と神の存在を」と刻したのです。ジャック・シャルマンは、作家**芹沢光治良が創作した虚構の人物とは思われません**。ジャック・シャルマンの確認を今後とも徹底調査して行きたいと思えます。